

茂木草介

うしろずんの詩



うらぶんの詩



茂本草介

検印廃止

うりずんの詩^{うた}

定価 五四〇円

昭和四十七年十二月五日 第一刷

著者 茂木 草介

発行者 浅沼 博

印刷
製本 凸版印刷株式会社

発行所 日本放送出版協会

郵便番号 一五〇

東京都渋谷区宇田川町四一―一

(落丁本・乱丁本はお取替いたします)

©1972 Sōsuke Mogi

0093—005013—6023

目

次

父の国	大阪探訪	東京探訪	母の目	爬竜 ハリウ	同じ苗字の人々	宮古上布	古い港	大和人 ダイワジン
-----	------	------	-----	-----------------------	---------	------	-----	--------------------------

二四三	二〇	二九	六	七	九	一	二	七
-----	----	----	---	---	---	---	---	---

星砂の浜

一六二

めちがふゆんた

一七五

履歴書

一九六

七日間のいのち

二一六

平家の織姫

二三八

死の砂丘

二三五

ふるさとの島

二五三

タテ糸とヨコ糸

二六九

うりずんの島

二九五

題字
裝幀

笹野由基
藤田高日子

うりずんの詩_{うた}

大和人

その南国の女の肌は美しかった。

沖繩の、那覇空港の冷房の利いたロビーで、村中正治は見知らない女の肌に見惚れた。

村中は東京在勤中からここ数年間は禁欲に近い生活をしていた。しかし、それだから惹かれたというのではなく、たとえば芸術品を觀賞するような氣持でもあった。

「南国の、果実の匂いがする……」

沖繩で生れて育った女に違いなかった。

沖繩口——沖繩固有の古い言葉にうりずんというのがある。

うりずんとは、夏のはじめの黒い大地に、水がしみとおって行く有様を言った言葉で、いかなれば大地の甦りをうたい上げた言葉でもある。そして、それはまた沖繩が過去幾百年にわたって外部からの圧制に悩みながら、いつかは必ず自由で豊かな生活が戻って来るに違いないという沖繩人の願いと祈りと誓いの言葉でもある。

その女にもそういう氣概めいた底深い美しさがあった。誰かを見送ったあとの休息なのか、それとも次便の客を迎えるための時間待ちなのかそれは判らない。銀色のケースからタバコを一本抜きとるしぐさがゆったりとしていて亭主持ちの落着きのようでもあり、逆に、爪のちい

さい丸い指の感じが未婚娘の無邪気さを見せているともいえる。

「実に、うつくしい……」

村中は、自分がもう十年若ければ、なんとか口実を設けてこの女に話しかけたであらうと苦笑しながら、半銀髪の髪の毛を左手の指でかき上げた。村中はよく左手を使う。しかし決して左利きというのではない。だが、東京から二時間四十分の機内は冷たく、三十六度の空港へ降ろされて、いままたこのロビーの冷房に出会うと、急速な冷暖の変化に感じきれなくて右腕の筋肉が痛みだすのだ。この痛みの原因はなにか。もちろん、村中は自分では知っているが他人には話したことはなかった。

女は、ふと村中の視線を感じてこちらをふりむいた。たしかに村中は長い時間、女を見詰めすぎたようだ。女はやや露骨に厭悪えんおの色を示して顔をそむけた。

「部長、すんまへん。クルマが渋滞しよりましてな」

と大阪弁の宮原七郎が汗を拭きながら走りよって来た。宮原は新大和興業株式会社の那覇支所長だが、職制上は課長クラスで、本社から出向して来た村中がきょうから支所長に代るのである。

「手荷物は？」

「まだ取ってないんだ」

「ほな、わてが取って来まっさ」

宮原は正直で気さくで仕事熱心だが支所長としての業績はかんばしくない。宮原が荷物を受取りに行ったあと、村中が目を向けると、女が腰掛けていたベンチは空席になっていた。

空港から那覇市内へ向う国道はどこどころ舗装が剝^はげていてクルマのうしろへ土煙りが舞いあがる。しかし、空は水のように青い。

「沖縄のタクシーは安いんだね」

「へえ、復帰前は二十セントで、それを換算するときに便乗値上げて七十円にしよりました、それでも内地の半分よりまだ安い」

しかし他の物価は値上りしていて、本土とはバランスが取れない部分が多いという。

「さっき、空港で綺麗な女を見たよ」

「沖縄の女でっか」

「そうらしい」

「沖縄にはべっぴんさんが仰山いてまっせ、今夜、ご案内しまっせ」

「それは有難いけど、いかがわしい場所はごめんだよ」

「いかがわしいことおまへん。高級だっせ」

宮原のいうとおり、その店の構えは東京や大阪へ出しても恥かしくないセンスのいいバアで店の名を「あだん」といった。

あだんは沖縄と台湾に多い熱帯植物で繊維は帽子の材料となり茎は弦楽器の胴の材料になる。

「部長もきょうから沖縄チョンガーやさかい、せいぜい楽しんでくはれ」

「ぼくは東京時代からチョンガーだよ」

「ア、そうだったな」

村中は三年前に妻を病死させた。子供もない。

店の奥で、小編成の楽団が南米系のリズムを振りまいているが、店が広いせいもあり気にならない。楽団員に愛嬌のある黒人が混じっている。あの男はもとはアメリカの軍曹で、沖縄の女に惚れて除隊後那覇へ舞いもどって来たのだと宮原がいう。

「いらっしやいまし」と、リョウ子という若いホステスが寄って来た。

「お客様方は、おはじめて？」

「あほかいな。わてはこの頃、大方、毎晩来てるやないか」

「あら、ほんとだ。大阪弁のおっちゃんね、宮原さんでしょう」

宮原は苦笑の顔を村中へ向ける。

「この子、見えすいたテクニックを使いますねン。沖縄の戦後派でな、どむなりまへんねン」

「でもさ、おっちゃんには私に惚れてるんでしょ」

「そないにズケズケと、ほんまのこといいなはん」

リョウ子は笑いながら村中の右腕へ甘えかかる。

「……………」

「あら、痛むの？ 神経痛？」

「神経痛はひどいね、まだそれほどの老人じゃない」

「そうね、シルバークレイが素晴らしいわ。あなたの方が宮原さんより偉いんでしょう」

「そやそや、わては一生ウダツのあがらん男や」

と、宮原が近くのシートへ腰を据えた。

リョウ子の手で宮原がキープしている黒ジョニが運ばれた。沖縄では高級ウイスキーの方が割安だと宮原がいう。

「キミ、リョウ子さんていうの」

「はい、どうぞよろしく」

「ママ呼んで来てんか」と宮原が催促する。

「はい。私じゃ駄目？」

「違うがな、部長に紹介するねん」

「ア、そうね」

リョウ子が立って行く。

「あの子、部長のこと神経痛やいいよりましたな」

「面白い子だね」

「いらっしゃいませ」

と白いスーツのよく似合う女がテーブルの前へ立った。

「ア！」あんな女だ。女はロビーでの厭悪の表情を忘れたように鮮やかに明るい微笑を浮かべている。

村中はふっとまじめな声を出した。

「昼間、空港で逢いましたね」

「あら、そうですか。私に似たような女は沖繩に沢山いますのよ」

客扱いに慣れた女は、すぐに客のまじめな雰囲気をごわしにかかる。それは客との間に一定の距離を保つ必要上からの技術だが、おきまりの枠にはまると冷たい感じだけを客に与える。村中は黙った。

「……………」

「失礼」

その女は敏感に村中の反応を見てとつたらしく、低くふだんの声音で答えて村中の横へ腰を沈めた。

「ママさん、あしたは日曜やさかい部長を案内して名所旧蹟を廻ってくれへんか」

「いいわよ、昼間なら喜んでいたします」

女は、店では小夜子という名で通していた。小夜子は内地から来た目ぼしい客の求めに応じて、沖繩を見せて歩いた経験が度々ある。

小夜子は村中をタクシーに乗せて、はじめは那覇の市中や郊外を、なんの説明もつけずにクルマの窓から好きなように眺めさせた。

米軍の基地の前も数回通った。鉄網で囲まれた基地やオフリミットの掲示や、住宅区の芝生で遊ぶ米軍将校の子供たちや、英語だけで日本語のない看板の並んだ町の風景などに飽きが来たころ、彼女は運転手に命じて平和通りへクルマを向けさせた。クルマは沖繩中どこへ行っても右側通行である。

「東京にアメ屋横丁というのがありますわね、それから本土の田舎へ行くところこの朝市と
いうのが方々にあるでしょう。その二つを合わせたような町があるんです」

「東京へ行ったの」

「いいえ、本で読みました。その市場では売手も買手も女が多いんです」

「沖縄の女はよく働くってことかな」

「そうです、私も沖縄の女」

小夜子はクスッと笑いながら、クルマから降りて村中の先へ立つ。

その町には、小さい店舗を構えたのもあれば露店もある。アメリカの商品、日本の商品、罐詰や端切れの布につけた値札には、まだドルやセントがそのままになっているのがある。

「なにかお買いになりますか」

「いや」

トマトやキャベツや日用の食品も多い。この雑踏のなかでは小夜子は異人種のように美しかった。

首里城の傍の弁財天の池には蓮の花が大きなつぼみを持っている。

「綺麗だね」

「ええ。こちらへ、商用でいらしたんですか」

「宮原君と同じ会社だよ」

「それは知ってますけど、宮原さんのご商売、よく知らないんです」

「うちの会社はひとことでいえばなんでも屋なんだよ。沖縄が本土へ復帰するまでは、内地の雑貨を持って来て沖縄の泡盛や宮古上布を内地へ持って帰った。こんどは観光事業に手を出してね、ぼくは土地を買いに来たんだよ」

「土地業者は、内地から沢山来てますわ」

「そうだろうね、前途は多難だよ」

二人はクルマを待たせてある坂道まで肩を並べて黙って歩いた。そこに守礼の門があった。門に「守礼の邦」という扁額がかかっている。

「守礼の邦」

「ええ、お城の門ですね」

明治十二年、琉球最後の王、尚泰王が日本政府に首里城を明け渡して東京へ行くときに琉球の人民に歌を残した。「いくさ代も終て、みろく世もやがて、嘆くなよ臣下、命ど宝」……やがて争いの世は終つて、平和な弥勒の世が来る筈だ、それまでは嘆くな、いのちだけは大切に達者に暮せよ。……いくら苦しい目に会つても耐えて忍べ。それが沖縄びとの昔からの処世訓でもあり人生訓でもあったといえる。

そういう歴史上の事実を、小夜子はさりげない調子で村中に語った。沖縄の歴史を、本土人である村中に語っても、その口調の中に同情を求めるでもなく、また、怒りを籠めるといふのではなく、どちらかといえば観光バスの案内ガールが物慣れた口調で繰返してしゃべるあの冷たさに似たものを持っていた。

「ママはいろんなことを知ってるんだね」